

外国人を支援しようとする人々が持つ学び に対する価値観

——「やさしい日本語講座」を事例として——

東 弘子・米勢治子

1. はじめに

2018年（平成30年）12月の「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」成立・公布により、すでに、日本では本格的に「移民」と呼ぶべき外国人の合法的受入に大きく舵を切ったと言えるが、そもそも外国人住民増加のきっかけとなった1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正以降において初めて生じた大規模自然災害である阪神淡路大震災を機に、「多文化共生」「やさしい日本語」といった概念が注目され始めた。

「多文化共生」は、震災発生翌日から活動を始めた「外国人地震情報センター」を母体に設立された外国人支援NPO「多文化共生センター大阪（田村太郎代表理事（当時）」の団体名に使われている。その後、2006年に地方公共団体における「多文化共生の推進に係る指針・計画」の策定に資するため、総務省が「地域における多文化共生推進プラン」（平成18年3月）を策定したことで、一気にその概念が広がり、2020年には、外国人住民の増加・多国籍化、在留資格「特定技能」の創設、多様性・包摂性のある社会実現の動き、デジタル化の進展、気象災害の激甚化といった社会経済情勢の変化を踏まえ、「地域における多文化共生推進プラン（改訂）」（令和2年9月）が公表されている¹⁾。

「やさしい日本語」は、弘前大学人文学部社会言語学研究室佐藤和之教授（当時）のもと情報弱者である外国人住民への伝達方法として主に日本語の構

1) 総務省報道資料「「地域における多文化共生推進プラン」の改訂」参照。 https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei05_02000138.html

造に着目した研究が進められ²⁾、災害時における「やさしい日本語」、減災のための「やさしい日本語」と変遷を経て、その後も多くの研究者や団体によって「やさしい日本語」の研究や普及活動が行われている³⁾。自治体においては「やさしい日本語」を情報伝達手段の多言語の1つとして広める動きが進み⁴⁾、さらに、生活情報や観光案内⁵⁾などの「やさしい日本語」への広がりを見せている。2020年8月には出入国管理庁・文化庁による『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』⁶⁾が公表され、外国人住民が増加、多様化している社会背景と、コミュニケーション手段としての「やさしい日本語」の必要性がより広く知られることとなった。

近年、「多文化共生社会」を目指すことを前提に、多くの自治体や国際交流協会で「やさしい日本語」講座が開催されており⁷⁾、自治体職員、日本語教師・日本語ボランティア、広く一般市民などマジョリティである日本語話者を対象とした研修型の講座や、日本語非母語話者も巻き込んだ交流型の講座、防災訓練の一環として「やさしい日本語」で情報を伝える研修などが、さまざま実施されている。また、医療現場⁸⁾や工場での「やさしい日本語」など、就労現場における日本人従業者を対象にしたものも見られるようになった。

こうした社会人を対象とする市民講座においては、講座の主催者側による学

2) 佐藤 (2016) 参照。

3) 岩田 (2013)、義永 (2015) など参照。

4) 白山・芹川 (2020)、白山・岡本 (2020) に具体的事例が多く紹介されている。

5) 旅行者を対象とした「やさしい日本語ツーリズム研究会」では、対象を拡大し啓蒙や情報発信の活動を行っている。関連書籍に吉開 (2020) がある。

6) 出入国在留管理庁・文化庁 (2020年8月) 『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』 https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/92484001_01.pdf

7) 47都道府県 (またはその市町) の国際交流協会を閲覧したところ、規模や頻度、外部講師によるか職員によるか、オンライン、出前講義、などの違いはあるものの、2021年～2022年の期間に、「やさしい日本語」を学ぶ研修会や講座の開催情報記録を検索できなかったのは、青森県 (ただし2019年に開催の記録あり)、奈良県、徳島県の3県のみである。(2022年11月4日筆者による調査)

8) 医療分野では外国人患者、外国人医療者の増加による多文化化で、医療通訳、機械翻訳、やさしい日本語などの言語コミュニケーションツールに関して注目が集まっている。「やさしい日本語」については「医療×「やさしい日本語」研究会」ウェブサイト参照。 <https://easy-japanese.info/>

びの目標の設定も重要であるが、学習する受講者がそこでどのような学びをしようとしているのかと言う価値観が、講座や研修において多文化共生に寄与する人材の育成につながるかどうか、左右する重要な要素であると考え。そこで本稿は、2022年6月－7月にかけて開催された(財)愛知県国際交流協会主催「令和4年度実践！ やさしい日本語講座」(全3回)において、講座の受講者がどのように講座の情報を受け止め、疑問を持ち、感想を持ったのか、という点から、外国人支援に関わる人々の学びに対する価値観を分析する。さらに、学びの阻害要因となる可能性のある記述から、今後の市民講座において留意すべき工夫についても言及する。

2. 愛知県国際交流協会主催「令和4年度実践！ やさしい日本語講座」

2.1 「やさしい日本語講座」開催の経緯

愛知県は、2022年の統計で、外国人住民数258,790人、外国人住民の割合3.43%であり⁹⁾、ともに東京都(外国人住民数517,881人、外国人住民の割合3.75%)に次いで全国2位という、国内有数の多文化化先進地域である。その愛知県において、2018年に「あいち国際戦略プラン2022」「あいち多文化共生推進プラン2022」の両プランが策定されたのを踏まえ、公益財団法人愛知県国際交流協会では2019年に「愛知県国際交流協会事業推進計画2023」(通称「LEAD PLAN」)を策定した¹⁰⁾。「永住化や高齢化の進展による外国人県民の様々な世代の増加、アジア圏出身者の顕著な増加に伴う多国籍化などの社会情勢の中で生じる様々な課題に的確に対応し、地域の国際交流・国際協力や多文化共生の地域づくりを計画的・継続的に推進するため」¹¹⁾ 2019年度から2023

9) ここで示した外国人住民数、および外国人住民の割合は、政府統計「住民基本台帳に基づく人口、人口動態および世帯数調査」2022年(令和4年1月1日住民基本台帳人口・世帯数、令和3年(1月1日から同年12月31日まで))の「【総計】都道府県別人口、人口動態及び世帯数」と「【外国人住民】都道府県別人口、人口動態及び世帯数」より算出したものである。

10) <http://www2.aia.pref.aichi.jp/somu/j/disclosure/PDF/r3/leadplanhyoka.pdf> これは2009年3月の「愛知県国際交流協会事業推進計画」、2014(平成26)年3月の「新愛知県国際交流協会事業推進計画」を引き継ぐものである。

11) <http://www2.aia.pref.aichi.jp/somu/j/disclosure/PDF/r3/leadplanbesshi.pdf> 「愛知県国際交

年度までの5年間の計画期間において取り組むべき目標を定めたものである。

その事業計画の重点施策としては、①人材育成：グローバル社会、多文化共生社会で活躍する人材の育成、②安心・安全の確保：外国人県民が安心・安全に暮らせるための相談支援や災害時における支援などの充実、③日本語教育：外国人県民の日本語習得のための支援、の三つが掲げられており（LEAD PLAN 第3章 p.14）、事業の実施にあたっては協会の定款に定める4つの柱、すなわち「1 国際交流・国際協力活動の推進、2 多文化共生の地域づくりの推進、3 国際化の推進役となる人材の育成、4 国際化に関する調査研究、情報提供」に沿って、36の具体的な施策を示している。そのうち、「3 国際化の推進役となる人材の育成」における具体的施策のひとつに「やさしい日本語講座の開催」が新規事業として定められたことで、2019年度より予算措置がなされ、愛知県国際交流協会主催「実践！ やさしい日本語講座」が開催されることとなった。

事業計画には、

(6) やさしい日本語講座の開催 新規 日本語の不自由な外国人県民の方々にも理解しやすいよう、敬語や漢字熟語などを平易な言葉に置き換えたりした「やさしい日本語」は、災害時はもとより日常生活での外国人県民との意思疎通の効果的なツールとして大変期待されていることから、より多くの県民が、より良い「やさしい日本語」の使い手となることができるよう、一般県民等を対象とした講座を開催する。

とあり、計3日間の講座が年に1回、論文執筆時点（2022年11月）までですでに4回開催され、毎年、延べ100名程度（講座受講者数は各回30-40名程度）が受講している¹²⁾。事業計画では一般の県民を対象としているが、外国人住民と関わりを持つ人々への啓蒙となるよう、愛知県国際交流協会では、協会ウェブサイトでの広報だけでなく、愛知県内の地域日本語教室や外国人住民が利用する公的機関にも講座開催の案内文を送付している。

流協会事業推進計画2023」中間評価結果より策定趣旨を引用。

12) 「愛知県国際交流協会事業推進計画2023中間評価評定表」参照。<http://www2.aia.pref.aichi.jp/somu/j/disclosure/PDF/r3/leadplanbesshi.pdf>

本稿筆者の東は、2回目の2020年度から2022年度にかけて本講座の講師を担当している。Covid-19の感染拡大の影響等により、3回すべてがオンライン講座であった。本稿で紹介する事例は、2022年6月に実施されたものであり、台湾からのオンライン参加となった講師担当の東のほか、本稿の筆者の米勢は、協力者として、初めて講座の運営・進行にかかわった。

2.2 「令和4年度」の講座の概要

講座は、愛知県内市町国際交流協会・市町村職員、外国人と接するボランティア、やさしい日本語に興味がある人などを対象として募集しており、定員は30名、参加費無料、全3回（1回3時間）の課程で、当該年度は6月23日（木）から毎週木曜日13時から16時に、オンラインで開催された。過去3回の「やさしい日本語講座」は、年度末に近い時期の実施であったが、愛知県国際交流協会の担当者によれば、外国人を対象とした窓口対応への異動は4月が多いことから、異動後早い段階での本講座受講が効果的であると考え、当該年度で開催時期の変更を計画したという¹³⁾。当該年度も含め、毎年応募者多数により抽選をおこなっていることから、本講座への関心は高いものとなっていると言える。

今回の講座受講者32名の所属の内訳（申込時の本人記述）は、地域ボランティア：16名、市町村など公的機関職員：10名、一般企業職員：3名、なし：3名であった¹⁴⁾。立場は違うものの、日本在住の外国人を支援しようとする人々である。第1回目は出席31名・欠席1名、第2回目は出席30名・欠席2名、第3回目は出席28名・欠席4名であった。

講座はオンライン会議（Zoom）を利用し、愛知県国際交流協会職員によって司会及び参加者の出入室の管理など会議の操作がなされ、運営された。講座内容の概要は以下の表1の通りである。

13) 過去の開催状況については、愛知県国際交流協会のウェブサイト内「多文化共生に関する講座・研修」のページに記録がある。<http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/yasashinihongo/2022.html>

14) 後に紹介する無記名アンケートで、研究活用を承諾したのはこのうち25名であるため、3.で示す数字とは、ずれが生じている。

表1 愛知県国際交流協会「実践！ やさしい日本語講座～2022～」の概要

日程		講座テーマ	概要・目的
第1回 6月23日(木)	第1講	私たちの日本語コミュニケーション	自分自身が日頃どのように日本語と関わっているか、ワークを通して知る。情報伝達だけが言語の機能ではないことを実感する。
	第2講	「やさしい日本語」と社会背景	「やさしい日本語」が必要とされる背景、日本社会の現状と、現在実践されている取り組みを紹介する。なぜ必要なのかを考える。
第2回 6月30日(木)	第3講	「やさしい日本語」対面伝達の事例	コント劇から、外国人とのコミュニケーションでどのような障壁があるのかを考える。通常のお知らせ文書をやさしい日本語に書き換える練習をグループワークで行う。
	第4講	伝えることを選ぶ/捨てる勇氣	コミュニケーションで重視される「礼儀」「正確さ」と同時に、緊急時のコミュニケーション等で「今大切なこと」の優先順位をつけて選ぶことの難しさと重要性を知る。
第3回 7月7日(木)	第5講	読み手に伝わる文書とは	日本人同士であっても、メールなどの「文字情報の伝達」においてわかりやすくすべき工夫を知る。『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』を使ってグループワークで考える。
	第6講	必要な情報ですか？	街にあふれるノイズサインとなりうる掲示について考える。今後、やさしい日本語の文書発信に役立つツールの紹介をする。参加者全員からの発言で学びの共有をする。

オンラインの講座であるが、多様な参加者が、それぞれの立場で考え実践していることをできるだけ共有して作業できるよう、各回、ブレイクアウトセッションの時間を設け、3-4名でのグループワークを1回以上取り入れるようにした。

また、1回3時間×3回という連続講座の中で、内容として重視したのは、参加者自身が日常的に無意識に使用している日本語そのものが、時と場合に依じてさまざまな変異を持っていることに、気づいてもらうことである。「慣れ親しんだ日本語」が、場に応じたふさわしさを持っていることから、非常に豊かな表現のバラエティはあるが、それらをすべて非母語話者が習得するためには、かなりのステップが必要であることを理解した上で、どんな場面で誰のために「やさしい日本語」が必要であるのか、受講者自身が考える時間に多くを費やした。

そのほか、「やさしい日本語」をはじめ、どんな日本語（言語）も万能ではないこと、多すぎる情報は、最低限の情報を抽出するのを難しくするだけでなく、必要のない情報によってかえって不安を呼び起こすことがあるなど、文型の工夫や特徴といった技術的な側面については参考文献を紹介しながらごく簡単に触れるにとどまり、むしろ、情報伝達や多文化共生にとって必要なコミュニケーションのあり方を、多方面から考え直し、その中の一つ的手段として「やさしい日本語」を位置づけることに重きを置いた。「やさしい日本語」だけがあれば万全なのではなく、選択肢の一つであることも強調した。

また、毎回講座終了後に、アンケートフォームを提示し、新たに得た知識や疑問点などを回答するよう依頼し、その記述を次回講座の初めに時間をかけて採りあげて解説をした。

受講者からは、そのふりかえりアンケートを通じて、さまざまな意見や疑問が出された。次の章では、こうした受講者の声から、学びの気づきや学習態度を抽出し、価値観を抽出する。なお、本研究で分析対象としたのは、本研究に協力する同意を表明した受講者の回答だけである。初回講義において、アンケートフォームの回答を研究利用する目的を告げ、協力できるかどうかをフォームに記入する欄を設け、同意を確認した¹⁵⁾。

3. 講座受講者の価値観の分析と考察

3.1 受講者について

講座受講者32名のうち、25名から、講座後のアンケートフォーム回答の研究利用の承諾を得た。1回目講座への回答は23名、2回目は22名、3回目は20名である。また、25名のうち3回とも回答したのは17名、2回回答したのは6名、1回のみ回答者は2名である。同意した25名全員の3回分の回答がそろっているわけではないが、2回、1回のみ回答者の回答についても分析対象とした。

15) アンケートフォームの記入は、同意の有無にかかわらず、すべて無記名である。ただし研究協力の同意者に対しては属性記述を要求し、さらに、ニックネームの記載によって、3回分の回答の回答者を同定した。

回答フォームに記述された25名の属性¹⁶⁾は表2の通りである。母語については、日本語24名、スペイン語1名であった¹⁷⁾。

表2 受講者（分析対象者）属性と人数分布

職業または立場	人数	性別及び年代別人数分布											
		男						女					
		29歳以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	29歳以下	30代	40代	50代	60代	70代以上
A. 地域日本語教室ボランティア	10	1			1		1				2	2	3
B. 市町村など職員	8	1	2					2	2		1		
C. 一般企業職員	2			1					1				
D. 通訳ボランティア、コミュニティ通訳	2										1	1	
E. その他（主婦、一般人、今後ボランティアを希望：各1名）	3				1						1		1
計	25	2	2	1	2	0	1	2	3	0	5	3	4

3.2 分析の対象と結果

分析の対象は3回のアンケートフォームに記載された文言である。アンケートでは毎回4つの項目について記述を求めた。1「今日の講座の中で、印象に残ったことは何ですか?」、2「今日の講座の中で、初めて知ったことはありましたか?」、3「今日の講座の感想、意見、質問などを書いてください。」、4「次回、補足してほしい部分があれば書いてください。」の4つである。25名の3回分総回答数は65回答であった。

16) 「職業または立場」について、アンケートフォームでは「1市町村などの職員、2国際交流協会などの職員、3一般企業の職員、4地域外国人と交流する市民、5地域日本語教室ボランティア、6地域日本語教室以外で日本語を支援する人、7学生、8その他」という選択肢から複数選択可とし、「その他」を選択した人は自由記述をする方式をとった。「自営業かつボランティア」や、さまざまなボランティアを兼ねる複数回答はあったが、市町村職員や企業職員と「地域日本語教室ボランティア」の重複はなかった。上記表では、市町村職員、一般企業職員は回答通り、複数回答のうち一つでも「5地域日本語教室ボランティア」を選択した人を「地域日本語教室ボランティア」とした。「その他」のうち「通訳」に関連した記述があった人のみ別枠で取り出した。

17) 母語は複数選択可の設定としたが、単独回答のみであった。

このうち、1「今日の講座の中で、印象に残ったことは何ですか？」2「今日の講座の中で、初めて知ったことはありましたか？」の2つに対する記述内容から受講者の理解度を確認することで、講師サイドの意図の伝わり方をふりかえることは重要である。今回の回答には講座内容から逸脱しているものはなかったが、受講者の感想・意見を加えたものも見られたため、その部分を分析対象とし、3「今日の講座の感想、意見、質問などを書いてください。」4「次回、補足してほしい部分があれば書いてください。」に対する記述文と合わせて、それらから受講者個人の学びの価値観に関わると思われるものを以下の6つのカテゴリーに分けて抽出した。

- (1) 過去の経験・態度との参照
- (2) 今後の行動・態度、仕事への反映の言及
- (3) 講座の内容理解・参加のふりかえり
- (4) 講師に正解を求める問
- (5) 講師への依頼
- (6) 講座の進め方に対する要望

3.2.1 結果の概要

4つの設問への回答（回答総数65回答）の記述に学習者の学びの価値観が見られる(1)～(6)の要素が含まれていれば、それぞれ1件とカウントした結果、抽出総数は111件となった¹⁸⁾。表3は、表2の職業または立場A～Eとカテゴリー別の抽出文の数との相関を表したものである。

職業または立場別では、A地域日本語教室ボランティア（以後「A日ボラ」とする）とB市町村など職員（以後「B市町職」とする）が、集団として大きい。その二つに着目すると、人数では10人と8人であり、回答回数は28件と19件で、B市町職のほうが少ない。これは、提出回数が少ない受講者がいることによる¹⁹⁾。回答回数と抽出件数に着目すると、A日ボラの1回あたりの件

18) 「説明が分かりやすかった」「具体的な例示が多くよかった」や「ワークが難しかった」「役に立った」といった講座内容に対する評価の類は除外した。

19) B市町職8名のうち3回提出者は4名、2回提出者3名、1回提出者1名である。

表3 抽出文のカテゴリ別・職業または立場別件数

職業または立場	人数	回答回数	抽出件数	カテゴリ別件数					
				(1)過去の経験・態度との参照	(2)今後の行動・態度、仕事への反映の言及	(3)講座の内容理解・参加のふりかえり	(4)講師に正解を求める問	(5)講師への依頼	(6)講座の進め方に対する要望
A. 地域日本語教室ボランティア	10	28	43	4	13	7	2	12	5
B. 市町村など職員	8	19	39	6	15	11	0	3	4
C. 一般企業職員	2	4	15	0	4	2	1	5	3
D. 通訳ボランティア、コミュニティ通訳	2	6	6	3	0	2	0	0	1
E. その他（主婦、一般人、今後ボランティアを希望：各1名）	3	8	8	0	0	4	0	1	3
計	25	65	111	13	32	26	3	21	16

数は1.54で、B市町職の2.05であり、B市町職のほうが3割ほど多い。少なくともアンケートに回答した場合、B市町職のほうが、より件数が多いと言える²⁰⁾。

カテゴリ別件数の内訳を見ていくと、(1)過去の経験・態度との参照、(2)今後の行動・態度、仕事への反映の言及、(3)講座の内容理解・参加のふりかえりの3つは、B市町職のほうに回答が多い。一方、(4)講師に正解を求める問、(5)講師への依頼、(6)講座の進め方に対する要望は、A日ボラに多い。職業または立場による傾向や分析、というところまでは、この人数や回答件数からはたどり着かないが、B市町職は、職務として講座に派遣されている場合が多く、その一環として、過去の経験や今後の業務と結びつけて考える傾向が多かったと言えそうである。またA日ボラのほうに(5)講師への依頼が多くあったことにつ

A日ボラのほうは、10名のうち9名が3回提出、1名が1回提出となっている。

20) ここでは抽出件数のみを述べたが、回答文字数においても類似した結果がみられる。

いては、ボランティア研修等にも共通する課題として、留意しておくべき点であろう。

3.2.2 カテゴリー別の回答の分析

6つのカテゴリー別抽出文をもとに受講者の学びの価値観について考察を試みる。以下、いくつかの記述を抜粋引用して示す。引用文中の（ ）内の記述は、文意の理解のため引用者が補足した部分である。また、注目すべき点を示すため引用者によって下線を付した。引用文の最後の【 】内に、記述した受講者の職業／立場、年齢および講座の回を付した²¹⁾。

(1) 過去の経験・態度との参照

過去の経験・態度との参照のカテゴリーに分けた文には(2)今後の行動・態度、仕事への反映の言及と連動した記述が目立ったが、より中心的な論点はどちらなのかを判断して振り分けた。

- ①在留外国人のための日本語教育推進について、教育現場、職場などの個々の努力に任されているとしか認識していなかった。日本語教育推進法の立法・施行がなされていることを初めて知り、無関心だったことを恥ずかしく思っている。【A日ボラ・60・1】
- ②やさしい日本語で対応する際に「わかりましたか？」を使ってはいけないこと（が印象に残った）。市職員としてのこれまでの窓口対応の中で、心当たりのある経験がすぐに頭に浮かびました。あの時のあれは、そういうことだったんだと。【B市町職・29・1】
- ③子供への教え方についての話で、“これしかだめというものはない、これしかないという教え方だと行き詰まる。”というお話（が印象に残りました）。結婚前に小学校教員をしていたので、“学習の目当て”を達成できるように色々な試みをするといったことを思い出して、やさしい日本語も同

21) 職業または立場は、A日ボラ、B市町職、C企業職、D通訳、Eその他、年齢は、50代→50、回数は、1回→1のように省略し、【A日ボラ・50・1】という形で記載している。

じだと気づき、感慨深かった。【D通訳・50・1】

- ④ソーシャルワーカーの勉強をしていますが、ワーカーとしての心がけが、まさに日本語支援者にも当てはまることだと再認識しています。【A日ボラ・70・2】
- ⑤日本人と外国人が窓口などに来たときに無意識に日本人と話してしまっているので、今後は気をつけようと思います²²⁾。【B市町職・30・2】
- ⑥外国人に伝えていく際には全部を伝えようとするのではなく、本当に伝えたいことだけを伝えるということ。確かにその通りだなと思ったが、自分がそれをできているかと考えたときに、できていないなと思った。ついいろいろな情報をよかれと思って提供してしまうが、伝わらなくては意味がないので、ちゃんと伝えることの大切さを考え、取捨選択することの必要性を感じました。【B市町職・30・2】
- ⑦ボランティアで通訳に初めて出た時に依頼者から言われて印象に残っているのが、『通訳の方を見ないで、お互いに自分の言語で直接相手に対して語り掛けてください。』ということを通訳対象者双方にまず言ってください。』ということです。当事者はだれなのか、を常に念頭に置くというのは本当に大事なことなのだ、と、改めて感じました。【D通訳・60・2】
- ⑧実は、講演とか覚書をかいたんな絵を書いて出来るだけ簡潔に、概略をまとめ、要点を記憶に残す訓練をしています。翻訳作業をする人たちもまず、絵をおこしてから、別の言語で考えると聞きました。やさしい日本語も言い換えるだけでなく、必要なことを考える点で、似ていると思いました。（B市町村・50代・3回目）

どの受講者も過去の自身の状況や経験を思い起こして、ことばにしている。

- ①は、新たな、かつ重要な知識を得て、それが無かった自分から知識を知ったうえで活動に臨む自分をイメージしていることであろう。②～⑧では、職場や活動、学習での経験を通した気づきが生まれている。

22) コント劇の動画で、外国人の要件に対応する人が、当事者である外国人ではなく、通訳の日本人に対して話しがちなケースを視聴したことによるコメントである。

(2) 今後の行動・態度、仕事への反映の言及

全体コメント数111件のうち32件と、最も言及の多かったのが、この(2)のカテゴリである。

- ①参考になる、情報サイトの URL を知ることが出来て助かりました。【A日ボラ・50・1】
- ②やさしい日本語について、よく知らなかったので、本を注文しました。【A日ボラ・70・1】
- ③行政として日本に住む外国人に対して、必要な情報を伝達しなければならないということがよく分かった。【B市町職・70・1】
- ④小学生や特別支援学校の教師などいろいろな立場の方にやさしい日本語を教えていかなくてもいけない立場なので、今日のお話や教えていただいたサイトなどを参考に興味深く伝えていけたらと感じました。【B市町職・30・1】
- ⑤日本語が伝わりそうな人に向かって話すことが、外国の方をあんなに傷つけてしまうんだなということ。やっていないつもりですが、十分注意したいと思います。【A日ボラ・50・2】
- ⑥市役所の職員としては、「やさ日」化することで伝えるべき内容が漏れてしまう、というおそれがある気がします。制度等、細かい条件が多い中、どうしても伝えなければならない点が多岐にわたり、短くしたとしても煩雑になってしまう場合、どう伝えたらよいかを考える必要があると思いました。【B市町職・29・2】
- ⑦今後、外国人の対応をする際、この講座で学んだことが、頭の片隅にあるのとならないのでは、対応が全然変わるといいますので、これからどんどん実践していきたいと思えました。【B市町職・29・3】
- ⑧ YouTube で漫才みたいに楽しく学べたこともよかったです。何人にも見せました。【B市町職・50・3】

このカテゴリの抽出文はB市町職に多く見られた。①での「助かる」は、②と同様、次のステップとなる自身の主体的な学びへの展開が述べられていると言えよう。③④は職責としての理解と決意が、⑤では相手に寄り添い、自ら

をふりかえりつつ、現場に生かす決意が述べられている。⑥では実践で直面する困難に継続して対応していこうという態度表明が、⑦では学びを深める前向きな姿勢が、⑧では学びを周りの人々と共有している様が述べられている。

(3) 講座の内容理解・参加のふりかえり

ここでは、上記(1)(2)のような講座外の場と結び付けて考えるのではなく、講座内での自問自答（自身との対話）、グループ活動における他者との対話を通した学びについて見ていく。

①グループワークが、Zoomで初挑戦しました。慣れてくると便利なツールだということに気づきました。【A日ボラ・50・1】

②日本には英語以外の言語を母語とする人がとても多いこと。わかっているつもりでしたが、数値で見えて改めて驚きました。【A日ボラ・50・1】

③総務省の多文化共生推進プランの改訂版中に感染症流行時における施策も盛り込まれていること。グローバル的な交流が促進してきているからこそ、コロナもすぐに世界に広がりましたし、外国で起きている問題も他人事ではないんだと、改めて実感させられました。【B市町職・29・1】

④「やさしい日本語」とは何か、どのようにすればよいのかについて、講義をする機会をいただいています。おそらく、「どうすればよいのか」に受講者の気持ちが集中し、基本的な考え方だけでは満足いただけないような気がします。個人的には、具体的な事例よりも、考え方的なところが重要と考えていますが、どうでしょうか。【B市町職・29・1】

①は単純だが、学びの原点のような経験である。②も私たちがどのように気づき、学ぶかを如実に示している。③は「やさしい日本語」の枠を超えているようにみえるが、グローバルな視点をこの講座で得ている。④も学びの原点を求めて問を深めている。

次の⑤では、実践を通して解決しなければならない課題を発見している。

⑤皆さんの意見の中で出てきていましたが、相手の日本語レベルがわからないとどのくらいのやさしい日本語で話すべきなのかと判断するのが難しいなと思いました。わかりますか。と聞くと分かると答えてしまう人たちに

どのようにして日本語レベルを確認すればいいのかと思いました。【B市町職・30・2】

2回目の講座に対して出されたこの問いについて、講師（筆者）は、最終回となる3回目の講座の前回ふりかえりフィードバックの時間に、重要な課題として取り上げ、グループワークで話し合う時間を設けた。講師が自分の考えを回答として示すよりも、今後実際に直面すると予測される課題に対して、受講者同士で議論することが考察を深める道筋となると考えたからである。

このカテゴリーの件数は26件と、6つのうちで2番目に多く、⑤のように自らの課題として設定したり、次の⑥⑦のようにクリティカルな視点を導入したりして、講座の学びを深めたコメントが見られたことは注目に値する。

⑥医療現場の方々も、敬語が使えないと怒られるって、少し考えたら、許容範囲なのにとと思いました。【B市町職・50・2】

⑦日本語での正確な言い換え表現を探すのではなく、必要となる情報を伝えることが大切ということ。ワークショップの中で正確な言い換えを意識している人が多く、そうなりがちということを実感しました。【C企業職・30・2】

また⑥は、コミュニケーションにおける新しい言語形（敬語のない形）が社会慣例にはじかれるさまを客観視しており、⑦では協働学習の中で他者を客観的に観察している。

⑧漠然と、“やさしい日本語”が使えたらいいなと思って参加しましたが、やさしい日本語を通じて、歩み寄って生きる社会を作ると言う大きなテーマにとっても共感しました。今後とも自分のコミュニケーションツールの一つとして、やさしい日本語を勉強し、多文化共生社会に貢献して行けたら良いなと思います。【D通訳・50・3】

⑧では偶発的に出会った学びの場から自らの課題を発見し進もうとする姿勢が見受けられる。

市民講座は、成績評価されるわけでもなく、試験の合格を目指すものでもない。このように、新たに得た知見を自らの文脈や社会的課題として捉えなおすという学ぶ姿勢があることで、学びは深まり、広がるのではないかと。

一方、以下の(4)(5)では、主体的な学びを阻む可能性がある姿勢について示す。

(4) 講師に正解を求める問

- ①本日初めて小学2年生の外国人の「取り出し授業」をさせていただきました。(中略) まだ、ひらがなの読み書きも不完全な状態ですが、今日はホワイトボードに書くことが楽しいようでしたので、ドンドン単語を書かせていました。一応、今日は自己紹介を兼ねて、「○○は△△です」の文型を指導することになっていたのですが、こちらで質問し、口頭で正しく言えたものをホワイトボードに書き始めました。そこで、「ぼくわ7さいです。」となった次第ですが、先生なら、このままになさいますか?【A日ボラ・60・1】
- ②やさしい日本語劇団のコントを観て、やさしい日本語に置き換える練習を行ったとき、答えは一つではないことは理解できたが、講師の先生ならどのように表現するかもお聞きしたかった。【A日ボラ・60・2】
- ③自動翻訳と同様に変換している「やさしい日本語」のサービスがあると思えますが、本当に「やさしい日本語」になっているか気になります。「やさしい日本語」には正解は無いので間違いではないと思いますが、これまでの講座をお伺いしていると人の手で考えることが必要に思えます。以下、浜松市などでも利用されておりますが、自動翻訳による「やさしい日本語」の率直な評価をお伺いしたいです。(Web サイト URL 付き)【C企業職・40・2】

典型的な「正解を求める」学習態度と考えられるのは、上記の3件が抽出された。①と③は受講者が自らの課題を整理し自らの解がある上で賛同を求めているように見える。②は典型的な正解求めである。講座の講師を、「知識の泉」とだけ捉えていては、学ぶ範囲が講師の知識の範囲にとどまってしまう。新しい知識を踏まえて、自分自身の疑問を仲間と議論していくことに繋げられるために、こうした講座を活用してもらえるよう、アレンジが必要となる部分である。

(5) 講師への依頼

上記(4)の「正解求め」に限らず、アンケート項目の4「次回、補足してほしい部分があれば」が曲解されたのか、「～すればいいですか?」「教えてほしい」というフレーズが散見された。安直に「依頼」すれば、自分の困りごとが解決し、適切な手段を入手できているかのような、講師への依頼が複数あった。

①会話練習するためにはどんな順番(テーマ)で教えていけばいいでしょうか?

また なにか いい参考資料はありますか?【A日ボラ・70・1】

②子どもに文字を導入する際のアドバイスをいただけるとうれしいです。

【A日ボラ・50・1】

③医療現場ではどのような部門が外国人住人の対応をしているのでしょうか。・医療現場で実際にどの程度、採用されているのでしょうか。(中略)医療現場で採用されている事例を紹介して欲しいです。行政・インバウンド・外国人住人・医療現場以外でやさしい日本語を必要としている業界・団体などがあれば教えて欲しいです。【C企業職・40・1】

④今回の「ちょっと……。」のように外国人には理解できない日本人特有の曖昧な表現があれば教えてほしい。【A日ボラ・60・2】

⑤やさしい日本語劇団の動画リストが、あれば知りたい。【A日ボラ・2】

⑥やさしい日本語に関連したアプリやソフトなど有効活用できるものがあれば教えてください。【C企業職・40・2】

①②は地域の日本語教育現場の自身の課題の持ち込みである。アンケートの限界もあるが、自ら学ぶ姿勢が見られない。日本語ボランティアの受講者の半数がこういった類の依存型依頼をしている。これに対し、この講座は日本語教育の講座なのか、といった苦言もいくつか寄せられている。③は自身の興味関心を講師に安直に訴えるものであるが、自ら調べればかなりの知識が得られるはずである。④⑤⑥は安易で依存的な依頼である。

次に挙げる⑦⑧は、講座の学習内容への提案とも言える。

⑦やさしい日本語では表現があんまりできないと思いますが、やさしい日本

語を使って寄り添えるような話し方、書き方を教えて欲しいです。【B市町職・30・1】

- ⑧自分が外国人になった場合（海外旅行とか）に、うれしかったことや、いやな気持ちになったことなどを聞いてみたいです。【A日ボラ・50・2】

講師が、こうした依頼を受け止めて、調べて紹介することは可能であるが、(4)同様、講師が回答してしまえば、学びの可能性が閉ざされてしまう。こうした姿勢を持つ受講者に対し、受講者自身が主体的に講座内で相互に発信できるよう、どのような仕掛けやアレンジができるのか、環境を整えるといった点において、工夫の余地があろう。

(6) 講座の進め方に対する要望

受講者からの要望は大きく3つに分かれた。1つ目はグループディスカッション（オンラインのブレイクアウトセッション）の時間を多くとってほしいという要望である。特に1回目は、受講者の不慣れを配慮して、自己紹介を兼ねた簡単な課題への回答と短時間の討論の2回のみとしたためか、以下のような記述が多かった。

- ①ブレイクアウトルームの時間がもう少し長くてもいいかなと思いました。

私のグループは話し出すのに毎回少し時間がかかってしまって（みんな遠慮して）、盛り上がってきたところで切断になることが多くて残念でした。

【A日ボラ・50・1】

- ②ブレイクアウトルームでの時間がもう少しあってもよかったかなと思った。色々な方が参加されていて面白かったです。【D通訳・50・1】

一方で、初回はワークがうまく進まなかったという意見もあった。

- ③今日の講座は私自身初めて参加させていただいたもので、自分の理解力も乏しいせいか、先生の指示がイマイチわかりづらい部分があり、突然グループワークをさせられてもなかなかグループ内で話が盛り上がりませんでした。【B市町職・30・1】

しかし2回目以降は、ワークに取り組む時間を増やしたことで、ブレイクアウトルームを講師らが巡回して状況によっては介入・補助することで、多少状況

が改善したと感じられている。

④ブレイクアウトルームの時間がちょうどよかったです。意見もたくさん出て、とてもスムーズでした。【A日ボラ・50・2】

⑤グループのメンバーがみんな遠慮がちで話しがなかなか進めなかったです。先生がブレイクアウトルームに入り、声をかけてくださり助かりました。ブレイクアウトルームで皆さんともっとお話ができればと思います。【Eその他・50・2】

⑥グループワークなどで、実際に口や手を動かすのはいいことだと思う。他の人の意見を聞くのも、自分と違う視点を得られるので役に立つ。第4講では動画を観た後、グループワークがなくて残念だった。【その他・60・2】

この「やさしい日本語講座」の過年度の2回のオンライン講座におけるふりかえりの回答では、ブレイクアウトルームでのワークについては、賛否両論がかなり拮抗していた。今回の回答をそれと比較すると、オンライン会議が普及してきたことで、ワークの導入に対し抵抗が少なくなっている傾向が見て取れた。(4)(5)では依存的な態度を改善するための工夫が必要であると述べたが、対面の講座と遜色ないとまではいかなくとも、⑥にあるように、オンライン講座においても、講師だけでなく多様な参加者の経験や視点から相互に学びを受け取る準備が、受講者に十分にあると言える。講師サイドでより工夫して、積極的にディスカッションの場を導入することは重要であろう。

2つ目は、そのディスカッションに、進行役が必要だという要望である。

⑦ブレイクアウトルームに分かれた際にファシリテーターがいると、短時間であっても効率よくみなさんと交流できるのではないかなと感じました。

【B市町職・29・1】

進行のお膳立てを求める依存的な意見といえるが、2回目以降では、遠慮せず、誰もが主体的にリードしてよいとクラス全体に声がけをしてみた。ブレイクアウトのメンバーによって話題が尽きない部屋と会話そのものが滞る部屋があったようであるが、受講者たちが可能な範囲で協力し、解決していったようである。

3つ目は、前回の講座内容のふりかえりの時間が長すぎる、もっと時間を有効に活用してほしいといった要望である。これについては賛否両論で、ふりかえりによる学びがとても良かったという声も複数ある。

⑧前回の振り返りの時間が多くもったいなく感じました。資料でフィードバックいただいているので、講座ではポイントだけ振り返っていただけると嬉しいです。【C企業職・30・2】

⑨振り返りも大事だとは思いますが、振り返りの時間が長く、振り返りに時間を割くならもっとやさしい日本語の普及の手段やアイデア、外国人に限らずやさしい日本語を必要とした方（障害者など）などへの伝え方を教えてほしかった。【市町職・30・2】

⑩最初の先回の振り返りにとても感謝します。先回は、難しくてわからないと思っていたけど、こんなに深い内容を考えていたんだと！【市町職・50・2】

実際、講座3時間のうち、毎回1時間近くをふりかえりの時間にあてており、通常の講座よりも多いと考えられるが、連続講座を行うときの講師（筆者）のスタイルであり、受講者の気づきや質問を活用して再確認することが、深い学びに繋がっていくと考えてのことである。それについて、単に情報が重複していると捉え否定的に受け止められると学びが留まってしまうため、そのような態度を生じさせない工夫が必要になるであろう。

4. おわりに

以上、筆者2名が講師と協力者として実施した「やさしい日本語講座」において、講座におけるふりかえりフォームの記述を活用し、受講者の学びの態度や価値観を分析し、学びを深めていく姿勢や、学びを阻害する態度への今後の講座の工夫の可能性について考察した。本講座が、外国人支援にかかわる立場としては、地域日本語教室ボランティアと公的機関の職員という受講者が混在していたことで、その記述の方向性も多様なものになっていたと考えられる。

受講者個人の記述を、このようにカテゴリー別に抽出することで、受講者の学びの価値観を一定程度あぶり出すことができた。さらには、学びの阻害要因

になる閉じた問をくりかえす態度も見受けられたが、それをふまえ、市民講座における学びのフィードバックや講師からのメッセージの発信を工夫することは可能であると考えている。

謝辞

講座実施のためのふりかえりフォームの記述を、本論文の研究利用として承諾してくださった愛知県国際交流協会事務局および講座受講者のみなさまに、記して感謝申し上げます。

引用文献

岩田一成 (2013) 「やさしい日本語」の歴史 庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編 『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために』ココ出版、第2章所収

白山利信・岡本能里子 (2020) 「やさしい日本語」は多文化共生社会の橋渡し役 柿原武史・上村圭介・長谷川由紀子編 『今そこにある多言語なニッポン』くろしお出版、第7章所収

白山利信・芹川京次竜 (2020) 「地方自治体のホームページから見る多言語対応」 柿原武史・上村圭介・長谷川由紀子編、第8章所収

佐藤和之 (2016) 「外国人被災者の負担を減らす「やさしい日本語」—在住1年の外国人にもわかる表現で伝える—」 野村雅昭/木村義之編 『わかりやすい日本語』くろしお出版、第II部所収

吉開章 (2020) 『入門・やさしい日本語：外国人と日本語で話そう』アスク出版

義永美央子 (2015) 「日本語教育と「やさしさ」 義永美央子・山下仁編 『ことばの「やさしさ」とは何か：批判的社会言語学からのアプローチ』三元社、第1章所収

Values for Learning Held by Supporters of Foreigners in Japan: A Case Study of a Civil Seminar about “Easy Japanese”

Hiroko AZUMA and Haruko YONESE

Abstract

In Japan, where multiculturalism is progressing, “Easy Japanese” has become a hot topic in many situations, and its necessity is being increasingly noted. Accordingly, many lectures for citizens are being held by the administration of local governments in Japan.

This paper analyzes the kinds of learning values held by citizens in a course on “Easy Japanese” at Aichi International Association.

In June and July 2022, we, the authors, were in charge of teaching “Easy Japanese” classes. The learners of this course were the general public and officials of public institutions. After each lecture, we used an online form to collect opinions, impressions, and questions about the lecture from the learners. We made use of the answers to their questions at the time of the next class.

This paper extracts and analyzes the values to be learned from the opinions and questions raised in the surveys. In the analysis, we refer to attitudes that deepen learning and attitudes that hinder learning. We believe that the results of this analysis will contribute to improving the quality of public lectures.